

## ソースコミュニティが作る次世代のためのデータベース： ＜基幹研究：セネガルにおける諸民族文化の映像記録を題材とする情報強化＞

著者	三島 禎子
雑誌名	民博通信 Online
巻	170
ページ	12-13
発行年	2022-09-30
URL	<a href="http://doi.org/10.15021/00009952">http://doi.org/10.15021/00009952</a>

# ソースコミュニティが作る 次世代のためのデータベース

三島 禎子

本プロジェクトは、2017年に民博の情報プロジェクトとして実施したセネガルにおける「文化週間」の記録から、民族文化を紹介する映像資料を土台にデータベースを作成し、詳細な文字情報を補足することを目的にしたものである。それによって、対象となる民族文化についてのより詳細な知見を得るとともに、文化資源の保全と現地への還元を目指した。またデータベースを活用して、対象地域の人びとによる利用と情報提供をとおして、ソースコミュニティと博物館をつなぐ「フォーラム型ミュージアム」の実現を図るものである。

データベースを構成する映像資料は、セネガルのソニンケ民族が主体となる文化週間についての映像である。その成果についてはビデオテーク番組4本（H30年度）やみんなく映像民族誌（R1年度）の製作によって発表し、主体者や運営形態などに焦点をあて文化週間の全体像を紹介することができた。

しかしながら取材した映像記録は、時間が限られた番組としてすべてを取り込むことは不可能であり、この膨大なデータを有効活用するための方策として本プロジェクトをR2年から開始した。

以下、研究成果について整理するとともに、作業をとおして得られた知見について記述する。

## データベースの内容

2017年に撮影したセネガルにおける文化週間とは、セネガル河上流域の諸民族がそれぞれの文化を紹介する行事であり、収録年はちょうど10周年目であった。ソニンケ民族が主体となり完全に寄付だけで開催されている。伝統文化を回顧するだけではなく、国を隔てて流域にまたがる諸民族の連帯を謳い、かつ沿岸部を中心に発展した近代国家への周辺部からの発言を意識したものである。

本プロジェクトでは、5日間に20ヶ村を回って記録した映像資料を、演目、場所、人など適切なシーン別に241件の画像データに分割した。とくにビデオテークや映像民族誌に挿入することができなかった歌や演説の豊かな音声情報をピックアップすることに留意した。また、民族文化を紹介する演目ひとつひとつをカットしないで整え、さらに演目には直接関係がないものの民族文化を表象する踊りやパフォーマンスなどをもれなく拾い上げた。

241件の画像データには、いつ、どこで、何語で、誰が、

何をおこなったかという基本情報を加えた。そのうえで、内容についての説明欄を設け、全体としておよそ2,400件のレコードを、日本語、フランス語、英語で整えた。

## 作業体制

基本的な情報は本プロジェクト申請者が整理し、フランス語と日本語でデータベースを整えたうえで、リサーチアシスタントの協力を得て英語版を完成した。そのうえでフォーラム型情報ミュージアムプロジェクト室の担当者に、公開版のプラットフォームへのデータの移行やデザイン・レイアウト上の見栄えの工夫などを依頼した。

当初は、本プロジェクト期間中に対象社会の人びととワークショップを開催し、データベースの活用と情報追加の方法について共同作業をおこなう予定であった。しかしコロナ禍で海外出張ができず、ZoomやWhatsAppなどのツールを使って現地の限られた人と情報交換をするにとどまった。具体的には、パスワードで保護されたアクセスが館外からも可能になる仕組みを利用して、Zoomを使いながら現地の関係者にコメントを追加する仕組みを説明することができた。時差の問題もあったが、コンピュータにアクセスできる人が限定されているという状況を踏まえると、Zoomなどでのやり取りは必要十分な方法であったと思われる。これによって、短期間の海外渡航ではかならずしも実行できなかった各情報の精査と修正をすることができた。

限られた人というのは、情報をもっている対象地域の人、その情報を現地語からフランス語に翻訳できる人、さらにコンピュータを使って情報をファイルに書き込める人を指す。情報をもっている人はたくさんいるが、この3者が揃わないと作業を進めることができない。しかも対象地域とコンピュータを使用する人がいる首都ダカールは800キロメートル離れている。このような状況下で、実際の作業を進めるには多くの制約があった。

## 研究成果の概要

本プロジェクトの成果は、(1)セネガル河流域の諸民族の民族文化に関わる映像についての多言語化データベースの構築、(2)データベースの構築におけるソースコミュニティとの協働、(3)論文や講演による成果発表、の3つである。

(1)については、文化週間という行事を理解する枠組みと



ラジオ中継車の前で馬の演舞を始める男性（2017年、セネガル・バケル県、筆者撮影）

して、伝統や文化を紹介する演目だけでなく、演目を構成するための舞台の流れに注目して映像データを分割し、舞台の主演や裏方のストーリーも理解する仕組みを整えた。また現地語で展開する演目に関する説明を日英仏で整備し、対象地域の人びとにとっての文化資源の保全のみならず、国際的な活用を目指した。

(2)については、文化週間の映像取材時から始まった対象地域の人びととの協働を、データベースの情報精査という分野で深め、博物館と対象地域の人びととの協働のひとつのかたちを作ることに成功した。このソースコミュニティの母体は、地域ラジオというユネスコ主導でいわゆる開発途上国に設置された開発をリードするための拠点である。この実体をともなうソースコミュニティは、移民送出地域における「残った人びと」の戦略として注目すべき主体である。

(3)について、文化週間の運営とその目的についての分析は、『国立民族学博物館研究報告』44巻4号に研究ノートを執筆し、刊行された。データベースの作成とフォーラム型ミュージアムへの貢献については、日本アフリカ学会と民博の共同研究会にて発表したほか、『民博通信 Online』3号にて報告をおこなった。地域社会に関する考察として『季刊民族学』179号に執筆した。一般向けには「大阪府高齢者大学校」にて講演をおこなったほか、データベースの基盤となる映像資料を用いて作成した『映像民族誌』第34集の公開と講演をおこなった。

館内公開はR4年度中に実施可能であるが、映像データの館外公開の基準が全館的に定まっておらず、その決定を待つことになるかと聞いている。場合によっては映像データの加工などが必要になるかもしれない。現在はパスワードを知っている限られた人だけがアクセス可能になっている。

本プロジェクトは、対象地域の関係者との協働作業を前提としてきた。というのは、研究者を念頭においた研究のためのデータベースを作成するのではなく、対象地域の人びとの文化の保管庫としてのデータベースを目指したからである。ソースコミュニティが研究者とは無縁の一般の地域住民から構成されているという社会的性格から、現地からの研究成果を期待するにはいたらなかった。しかし今後、同地域が文化人類学などの研究対象として注目されれば、本データベースが貴重な情報源になると期待される。

### 三島 禎子（みしま ていこ）

国立民族学博物館学術資源研究センター准教授。専門は文化人類学、西アフリカ研究。共編著に *Questions de migrations et de santé en Afrique sub-saharienne* (L'Harmattan 2014)、論文に「民族の離散と回帰—ソニンケ商人の移動の歴史と現在」駒井洋監修編、小倉充夫編『ブラック・ディアスポラ』（明石書店 2011年）などがある。

## 考察

本プロジェクトでは、映像番組（ビデオテーク、みんぱく映像民族誌）では表現しきれなかった文化週間をめぐる諸実践や社会関係など無形または目には見えない文化遺産を、映像と情報というかたちで整理することができた。それは一般的な映像番組が他者による解釈に基づいて制作されるのに対し、本データベースは当事者自身が利用して、情報を修正・追加してゆくことによって自らの文化を語り、のちの世代に継承するという方向性をもっている。西欧中心史観からの脱却や権力構造から疎外された集団からの発言といった文化人類学が目指してきた課題を具現化するための新しい手法である。

対象社会の人びとが「記憶」として保全してきた文化遺産を記録することにより、どのような結果が生じるのかは未知数である。それは研究者と対象社会の人びとの協働作業によって作られた「記録」であり、相互作用の結果であるといえよう。たとえば、情報の内容について、「誰」という項目があるが、筆者は人物の属性を入れることを想定していたが、対象社会の人びとは人物の名前を入れることにこだわった。その結果、名前が分かる場合は姓名を挿入し、人物の社会的立場や行事における役割などは別途追加することになった。

本プロジェクトは公開することで完成するものではない。対象社会の人びとによる情報の追加、とくに現地語の逐語訳と演目の詳細な説明については、引き続き追加作業がおこなわれる。そのための基盤を整えたことによって、より広い層からのアクセスが可能になり、データベースが充実してゆくことが狙いであった。

今後の展開については、民博と対象社会の人びととの協働作業により、さらに情報の精査が進み、対象社会におけるディアスポラの同胞をはじめ同地域に関心をもつ研究者など、多角的かつ国際的な情報共有が進むと期待される。



演目紹介のあと、熱狂して踊る女性たち（2017年、セネガル・バケル県、筆者撮影）